

▶ しっかりと根付いているエスペラント

分科会が無神論や共産主義、そうかと思えばフリーメイソンなどをテーマにして開かれていたのにも驚きましたが、それ以上に驚いたのは主に夜に行われたコンサートのことでした。

ギターを片手に歌う二人の壮年の男性、女性だけのギターでの弾き語り、ヴァイオリンの演奏、28ほどの言語を操るフランス出身の男性エスペランティストなど、それぞれみんなエスペラントで歌うのを聴くにつけ、エスペラントが確かに文化として根付いていると思い感動しました。

どこにも故郷を持たない人工語であるエスペラントは文学的表現ができないのではないかと一時思い、かつてその点でエスペラントに不満を持っていたこともありましたが、しかしこれは、エスペラントに対する私の浅い理解であると実感的にも思いました。

世界のエスペラント事情に通じている菊島和子さんによれば、英語を母語とするエスペランティストたちが、「英語の表現力よりエスペラント語の表現力の方が大きい」と良く言うそうです。

エスペラントでのオリジナルの詩や小説を発表する人の存在を知ると、私も感性的にその言葉がわかるような気がします。意外に思われるかもしれませんが、現実に英語の先生だった人がエスペラントをしっかりと勉強し、エスペランティストとして活躍しています。

▶ 国ではなく民衆同士の交流言語

その代表的な存在が堀泰雄さんという群馬県前橋出身のエスペランティストです。堀さんは高校の英語の先生でした。父上がエスペラントを学習された方で、あれほどエスペラントに熱心だった父親に見習おうとエスペラントを毎日3頁読み、それを休まず7年間続け、毎月エッセイを2本書いてエスペラントをマスターされました。そしてエスペラントを自由自在に操り、東日本大地震の被害状況などをエスペラントでメールや本にして世界に発信していま

す。まさにエスペランティストの鑑のような存在です。堀さんはまさに民衆の一人として世界のエスペランティストたちに対して福島現在の被災状況などを発信し続けているのです。

リスボンでの初日の夜〈Nacia Vespero〉という主催国の夕べがあり、そこでポルトガルの民衆音楽

であるファドやフォークダンスが披露されました。その最後には客席の一番前列にいた私もポルトガルの若い女性から舞台に引っ張られて踊りました。その中にも堀さんの踊る姿も見えました。堀さんからは「大類さんも若いね。両腕で若い女性のお尻を乗せて・・・」と言われました。これは男女が一緒に輪になって踊る場面の中に、男たちが両側の女性たちのお尻を腕に乗せて踊るシーンでした。もちろんその中には堀さんもいたはずですが、

かつて栗栖^{くりすけい}継さんというチェコ文学者でエスペランティストだった方がいます。私も氏の警咳に接したことがありました。その栗栖さんは戦前、ロシアのエスペランティストと文通をしていました。ある時、そのロシアから送られてきた本の中に小さな紙に書いたメモが入っていました。そこには、「君たちが理想のように思っているロシア革命はそんなものじゃないよ」と記されていたのです。

日本のインテリの間では、ロシア革命を輝かしいものと見ていた中で、栗栖さんは初めてロシア革命に対して疑問を持つようになったのです。いわば民衆の本当の声がエスペランティストを通して理

解し合うような友人関係ができていたのです。

▶ リスボン散策

世界から1500人ほどが参加した大会でしたが、日本からも100名近い人が参加していました。その中に、名古屋から来た80歳になるご婦人が一人で参加していました。彼女は、エスペラントはどのようなのか、それを知るにはまず世界大会に参加してみよう、実際にどのように使われているのかと10年ほど前に初めて参加し、それからエスペラントを勉

第28回 ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』

大類 善啓 (おおるい よしひろ)

混迷の時代を拓くザメンホフの人類人主義「私は人類の一員だ！」

強し始めたと言ってくれました。彼女曰く、ツアーで海外旅行しても、ガイドがバスでいろんなところを案内するけど、帰ってきて何も覚えていない。その点で、エスペラント世界大会は違ふと、それ以降、この大会に参加しているようです。

リスボンは前にも書きましたが、私にとっては初めての地です。たいして解りもしない分科会にできるだけ参加しようと思えば、時間がなくなってしまう、リスボンの街歩きはできません。

大会が主催する遠足に参加する人も多いのですが、団体に観光するは止めてリスボンの下町をひとりで散策しようと前々から考えていましたので、地下鉄を利用してバイシャ地区、その西側のバイロ・アルトなどを歩きました。バイシャは低い土地、バイロ・アルトは高い地区という意味のようですが、高いビルとビルとの間の通りはなかなか趣きがあり、また路面電車のノスタルジックな雰囲気も大いに楽しみました。

チンチンと警笛を鳴らして走る路面電車には、季節から他の国々から来ている観光客も多く、英語やフランス語が飛び交っていました。

リスボンは坂の多い街です。おぼつかない足取りで坂を上がる老婦人を見ると大変だなあとも思いました。しかし、なかなか捨てがたい魅力がリスボンの街にはありました。かなりの日本人も分科会だけでなく、大いにポルトガルの旅を楽しんでいるように見えました。

➤ 高齢者が多い世界大会

少子高齢化現象が反映しているのか、この大会でも後期高齢者が多いように見受けられました。この大会とは別に、世界青年エスペラント大会がスペインであり、若い人たちはそこに参加しているでしょう。

日本から来たある人に、「大類さんはなぜエスペラントを学ぶことにしたの」尋ねられ、「呆け防止とホマラニスム(人類人主義)ですね」と言ったら、「最近ホマラニスムなんていう人も少なくなったね」と言われたのが印象に残りました。

「ホマラニスム抜きに何がエスペラントなんだ」という思いを持ちながら、これが今の世界のエスペラントの現状なのか、とも思いました。しかし、そうい

うことも含めて大いに勉強になり、またリスボンの日々を楽しんだ世界大会でした、

この連載もこれで一応、終わりにします。長い間ありがとうございました。最後にこの連載原稿を書くに当たって参考にした主な文献を記しておきます。

●参考文献

- 20世紀とは何だったのか—マルクス・フロイト・ザメンホフ、なだいなだ・小林司対談集、(朝日選書、1992)
- ザメンホフ—エスペラントの父、伊東三郎著、(岩波新書、1950)
- 高くたかく遠くの方へ—伊東三郎遺稿と追憶、渋谷定輔・埴谷雄高・守屋典郎編、(土筆社、1974)
- 嵐のなかのささやき、長谷川テル著、高杉一郎訳、(新評論社、1954)
- 長谷川テル—日中戦争下で反戦放送をした日本女性、「長谷川テル」編集委員会編、(せせらぎ出版、2007)
- 中国の緑の星—長谷川テル反戦の生涯、高杉一郎著、(朝日選書、1980)
- 人類愛に捧げた生涯—人物近代女性史、近藤富枝著、瀬戸内晴美編、(講談社、1981)
- 闇を照らす閃光Ⅱ—長谷川テルを上海・重慶に偲ぶ、あごら、(BOC出版、2004)
- 危険な言語—迫害のなかのエスペラント、ウィリッヒ・リンス著、栗栖 継訳、(岩波新書、1975)
- エスペラント—異端の言語、田中克彦著、(岩波新書、2007)
- 反体制エスペラント運動史、大島義夫・宮本正男著、(三省堂、1974)
- ザメンホフの家族たち—あるエスペランティストの精神史、高杉一郎著、(田畑書店、1981)
- 我が身は炎となりて—佐藤首相に焼身抗議した由比忠之進とその時代、比嘉康文著、(新星出版、2011)
- 吹雪く野づらに—エスペランティスト斎藤秀一の生涯、佐藤治助著(良書センター鶴岡書店、1997)
- 出口王仁三郎—屹立するカリスマ、松本健一、(リプロポート、1986)
- 日本エスペラント運動の裏街道を漫歩する—「人物」がつづる運動の歴史、小林司・萩原洋子著、(エスペラント国際情報センター、2017)
- ザメンホフの生涯、エドモン・プリヴァ著、水野義明訳、(リックマンズワース、1957)
- 人物でたどるエスペラント文化史、後藤斉著、(一般財団法人日本エスペラント協会、2015)
- リディア—エスペラントの娘リディア・ザメンホフの生涯、ウェンディ・ヘラー著、水野義明訳、(近代文藝社、1994)